

## ぎふライブラリークラブ企画催事「科学する絵本」

### —図書館と自然—

藤田敦子（ぎふライブラリークラブ、百科編集部）・浅井彰子（ぎふライブラリークラブ）・北村多佳子（ぎふライブラリークラブ）・横山きえ（岐阜県立加納高等学校）・田中一秀（ずかん作家）・大西健夫（岐阜大学）・池谷幸樹（アクア・トトぎふ）・仲谷一宏（北海道大学）

#### 【はじめに】

ぎふライブラリークラブは、「本を通じて人と人とがつながる」ことをコンセプトとした、岐阜市立中央図書館のボランティアグループです。クラブ員3人以上のメンバーが集まると、図書館のイベント企画を提出することができ、許可が得られると、図書館のイベントとして、図書館スタッフと協力しあいながら、開催することができます。図書館は、図書館のある「みんなの森ぎふメディアコスモス」内の会場確保や、岐阜市の広報紙やタウン誌などへのイベント告知、申込受付などを担当し、内容はクラブ員が中心となり運営します。尚、「みんなの森ぎふメディアコスモス」とは、「知の拠点」の役割を担う市立中央図書館、「絆の拠点」となる市民活動交流センター、多文化交流プラザ及び「文化の拠点」となる展示ギャラリー等からなる複合施設です。

ぎふライブラリークラブ内にはいくつものグループがあり、フリーアナウンサーであり子どもの発達心理学の専門家でもある浅井彰子をリーダーとして「科学する絵本」グループが立ち上がり、2つのイベントを開催することができました。

#### 【第1回 地球をめぐる水】

第1回の「科学する絵本」では、岐阜大学応用生物科学部の大西健夫准教授が中心となって著した『地球を旅する水のはなし』（福音館書店）を中心に開催しました。日本画家の曾我市太郎さんによる挿絵の原画の展示も行いました。『地球を旅する水のはなし』は大西准教授の専門である「水文学」を、子どもたちにもわかりやすく描き出された絵本で、30億年以上前に隕石によって地球にもたらされたと言われる水は、形を変えながら、空や山や川や海や、人間や動物の体の中などを通して、その総量は変わらずにめぐりめぐっている、という内容です。

イベントでは、パワーポイントを使用して絵を見せつつ、浅井による朗読で本の紹介をしたのち、大西准教授と岐阜大学の学生らが、雲を作る実験や、砂を動かして地形を作って等高線をリアルタイムで変化させることのできる「拡張現実(AR)砂場セット」の体験などを展開しました。



写真1 第1回のポスター



写真2 『地球を旅する水のはなし』の絵本



写真3 グループリーダーの浅井彰子と、大西健夫准教授。



写真4 拡張現実(AR)砂場セット体験

【第2回 絵本ずかんでまるわかり～ラララさめのくに～】

藤田らの百科編集部が中心となり、岐阜市のリトルプレス「さかだちボックス」より2017年10月に発行した『ラララさめのくに』は、北海道大学名誉教授の仲谷一宏博士の監修による「絵だからこそ語れるものもある」というコンセプトのもとで制作した「絵本ずかん」です。これを、市内の「星時」というカフェで読んだ、ぎふライブラリークラブのメンバーである北村多佳子が、『ラララさめのくに』のイベントを企画会議に図ったことから、第2回「科学する絵本」として開催が決まりました。

百科編集部では、2018年3月に東京・羽田空港のカフェにて『ラララさめのくに』の大きなイベントを開催していたため、その時の制作物や、その際の協力者からの標本やパネルなどを使用させていただき、展開することになりました。

メインのトークについては、北海道在住の仲谷博士より助言をいただき、仲谷博士の教室の門下生でもある、岐阜淡水魚園水族館アクア・トト ぎふの池谷幸樹新館長に講演を依頼しました。依頼当時は館長であることを知らず、気楽にお伺いをしましたが、申請書類を作成中、新館長になられていることがわかって動揺するものの、ご厚意を得て、そのまま講演をお願いすることができました。サメが専門でないことから多



写真5 第2回のポスター



写真6 左から、浅井、藤田、田中、池谷

少の戸惑いを感じておられたようですが、「魚とは?」という点を中心にお話していただいだけ、さらに、淡水からの発見例もある「オオメジロザメ」について、川を下った陸地からの栄養と、他に競合する相手がいないことから、決して体にとっては良いわけではない淡水の川を遡上した、という、陸と川と海の関係についての内容にまで触れていただくことができました。また、アクア・トト ぎふに収蔵されている「ミツクリザメ」の冷凍標本も公開され、子どもも大人もびっくりしていました。

そのほか、ずかんくんを中心に「いなばのしろさぎ」をモチーフにみんなで絵を描いたり、百科編集部の映像作家・寺島真希により制作された『ラララさめのくに』アニメーションの公開、そして、図書館イベントであるからこそその、図書館蔵書による「サメに関する本」の展示も行われました。

尚、ポスターやチラシは、第1回にひきつづいて、岐阜県立加納高校美術家の横山きえさんをお願いしました。フレッシュな絵柄で、本とはまたひとつ違う、新しい「科学する絵本」のイメージを創り上げてくれました。このことにより、ロゴも含め「科学する絵本」企画はイメージを固めることができたと考えてもいいのではないかと、思います。



写真6 企画の北村(右から2人目)と、協力者の人魚セイレーンも加わり、記念撮影

【まとめと考察】

「図書館には本はあるが実物がない。図書館だけではできないイベントをしてほしい」という司書の希望がありました。いろいろな立場の人が集まれば価値観のギャップはあるのは当たり前で、それを超えていくことも重要と思います。また、主催者(与える) - 参加者(受け取る)という関係だけでなく、一緒に取り組むことで得られる学びも大きく、そういう機会を創り出すことも、社会人の新たな学びの創出として重要ではないかと、考えさせられます。異分野の緩やかなつながりはその後も続くことができ、イベント時のみならず継続的な地域の力となり得るように思われました。